

紫 玉(しぎよく)

登録番号:第1404号

登録年月日:昭和62年8月7日

登録者:植原宣紘(山梨県甲府市善光寺1丁目12番2号)

育成者:植原宣紘

来歴:「高墨」の枝変わり

育成地:山梨県甲府市善光寺1丁目12番2号

特 性

■栽培特性

当初、樹勢はやや弱いと判断されたが、生長点培養によって獲得したウイルスフリー株の樹勢は従来のものより強く、若木では新梢の伸長が旺盛となり花振るいしやすい傾向が見られた。しかし、成木の相対的な樹勢は「巨峰」や「高墨」に比べやや弱いほうに属する。葉が小さくて裂刻のやや深いことが一つの特徴である。

巨峰群品種と同様の方法でジベレリン処理を行うことによって無核化することができ、同時に花振るいが回避され、安定した揃いの良い果房が得られる。

一般的な特徴は「巨峰」とほぼ同じ紫黒色巨大粒種といえるが、明らかに異なる点は、「高墨」(「巨峰」より約1週間早く熟す)に比べて、さらに約1週間熟期が早まる、いわゆる極早熟性品種ということにあり、育成地における露地栽培でジベレリン処理を行わなかった場合の完全着色期は7月下旬、成熟期は8月初旬となる。

新梢管理、ジベレリン処理等の栽培管理は「巨峰」に準じて行えばよい。果房は「巨峰」より小さいので切りつめは容易であるが、つめすぎると小さく丸い房になってしまうので、軽めに行うことが肝要である。収穫量は、早熟性を発揮させるために10a当たり1.2～1.3t程度に押さえるのがよい。

本種は、「高墨」より約1週間早い早熟性が生かされ、膨大な量の「巨峰」が市場に出回る前の価格的に有利な時期に出荷可能な品種として価値が認められている。

■果実特性

果房は「巨峰」よりやや小さく300～400gである。果粒も「巨峰」よりやや小さく、平均13g(30～28mm)程度であるが、最大17gに達するものも見られる。実止まりは「巨峰」より良好で、裂果は認められない。組織培養で獲得したウイルスフリー株の果実の糖度は18～22度に達し、食味、品質は「巨峰」と大差なく、非常に優れている。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

病虫害に対しては「巨峰」や「高墨」と大差ない。したがって、病虫害防除は両品種に準じた対策を講ずることで問題はない。

本種は、早熟で着色良好であるがやや着色先行型で、「巨峰」に比べて着色が進んだ割には減酸が遅れる。着色のみで収穫期を判断すると、7月中・下旬に収穫可能な紫黒色になる。しかし、この頃は酸味が強く、市場出荷すれば評価が落ちる心配がある。このため、完全着色から1週間ほど待って、食味が十分に良くなった時点での適期収穫に努めるべきである。

■地域適応性

ジベレリン処理による無核化で栽培が安定し、食味は「巨峰」と同じで裂果性もなく、耐病性も強く防除も「巨峰」程度であることから、栽培は比較的容易で適地の幅は広い。「巨峰」栽培が可能な気象、土壌条件下で安定した栽培が可能である。ただし、大規模栽培向けの品種とは言えず、「巨峰」の収穫期の前進、収穫時期の分散という意味で補完的な、経営改善のために極めて有用な品種と考えられる。

(植原宣紘)